

# 『今月の天候と農作業』

通巻第5544号  
6月号  
平成24年6月8日発行  
宮崎県  
宮崎地方气象台



## 【九州南部1か月予報】

向こう1か月の気温、降水量及び日照時間の各階級の予想される確率は次の通りです。

## 【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	30	30	40
降水量	九州南部	30	40	30
日照時間	九州南部	30	40	30

## 【概要】

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

<1週目の予報> 6月9日(土)～6月15日(金)

天気は、前線や湿った気流の影響で曇りや雨の日が多いでしょう。

(詳しくは週間天気予報をご利用ください。)

気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

<2週目の予報> 6月16日(土)～6月22日(金)

天気は、低気圧や前線の影響を受けやすく平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

<3週目から4週目の予報> 6月23日(土)～7月6日(金)

天気は、低気圧や前線の影響を受けやすく、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

## 普通作物

### ◆ 早期水稻

---

現在まで順調に生育していますが、6月は雨や曇りの日が多く気温も高くなるので、病害虫も発生しやすくなります。早いところでは6月下旬には出穂が始まりますので、生育状況を十分把握し適期作業を心掛けましょう。

#### 1 追肥

コシヒカリは出穂の20日前に穂肥を施用しますが、倒伏しやすいので、幼穂が1割くらいに伸びたのを確認し、葉色の濃淡を観て適量を追肥します。

#### 2 病害虫対策

穂いもちは、収量・品質を低下させる重要病害です。昨年は葉いもちで注意報が発令され、その後穂いもちの発生も多く見られました。今後曇雨天が続き気温が上がると発生が多くなりますので、穂ばらみ末期と穂揃い期に防除を行います。

また、カメムシによる斑点米は、等級格下げ要因の大半を占めています。良質なコメを作るため、穂ばらみ前に畦畔及び水田周囲の雑草の刈取りを終え、穂揃い期とその7～10日後の2回防除を徹底します。また、防除は周辺の作物に農薬を飛散させないように十分注意してください。

#### 3 水管理

6月上旬以降の幼穂形成期に16℃以下の低温が予想される場合は深水とし、低温から穂を守ります。低温でない場合は、穂ばらみ期まで間断かん水を行い、根の健全化に努めます。穂ばらみ期から出穂開花期までは水を最も必要としますので十分に確保しましょう。

### ◆ 普通期水稻

---

#### 1 田植え

「ヒノヒカリ」は、夏冷涼な西北山間地域を除く地域で早植すると出穂が早くなり、高温登熟障害による白未熟粒が発生し品質低下となります。これを避けるため6月20日以降に移植します。高温障害や倒伏に強い新品種「おてんとそだち」はヒノヒカリよりやや早い品種ですので、防除や収穫作

業を考慮して移植時期を決めましょう。晩生種の「まいひかり」は、生育期間が長いため「ヒノヒカリ」より早い6月上中旬を基準とした田植えを行います。

## 2 水管理

移植直後から活着までは、植え傷みを少なくするため、5センチのやや深水にして稲を守ります。活着したら3センチ程度の浅水にします。

## 3 防除

「いもち病」、「ウンカ類」の予防のために移植時に箱施薬を実施します。稲を食害するスクミリンゴガイが多い水田では、基準を守り薬剤防除や、ゴム手袋をして捕殺しましょう。

## 4 除草剤

除草剤には、ノビエの葉期で処理晩限が表記されています。ノビエの葉期は水田内に発生しているノビエの最高葉齢で判断します。ノビエの葉齢の展開日数の目安は、一葉期が移植後5日目、二葉期が8日目となります。代かきから移植までの日数が延びると、ノビエの生育が早くなるので散布遅れに注意します。

投げ込み型のパック剤やフロアブル剤等の普及が進んでいますが、処理時の水深不足による薬害の発生が見られます。処理時は最低水深5センチは確保し処理します。

水管理の良否が除草効果に大きく影響しますので、散布前には畔や水尻から漏水がないか確認し、散布後は掛け流しにせず1週間程度止水します。

(鎌田 博人)

## 施設野菜

### ◆収穫終了後の管理

---

今月でほとんどの施設野菜は栽培が終了します。次の栽培に向けて、ハウス内の害虫を死滅させてから宮崎型太陽熱土壌消毒（消毒法の欄を参照）を行いましょう。

本県のきゅうり栽培において、スリップスが媒介するウイルスによる被害及びトマト栽培においてコナジラミが媒介するウイルスによる被害が依然として見受けられます。

これらのウィルス病に一旦感染すると、回復は難しく草勢の低下等により収量は大幅に低下します。ウィルスの媒介は昆虫であり、ハウス内に生息するウィルス保毒昆虫をハウス外に飛散させると、近隣の雑草に寄生し繁殖するため、次作への感染が懸念されます。ハウス内の作物残渣を持ちだす前に、ハウス内の蒸し込みを10日間程度行い、ハウス外への飛散を防ぎましょう。

#### ◆夏秋果菜類の栽培管理

---

梅雨に入り曇雨天日が多くなるため、雨よけハウス栽培のきゅうり、ピーマン、にがうり等では、日照不足による草勢の低下や病害虫の発生が予想されますので、次の点に留意した栽培管理を行いましょ

①通路や畦間に滞水しないように、かん水は少量多回数で行う。また、ポリマルチ上に滞水した場合は速やかに除水する。

②着果負担を軽減するため、不良果を中心に摘果をおこなう。

③追肥は1回当たりの窒素分量を少なくし、窒素過多にならないように注意する。また、草勢が弱い場合には葉面散布等により草勢の回復を図る。

④摘葉や整枝・誘引を適切に行い過繁茂を防ぎ、通風採光を良くする。

⑤換気を良好にし、葉の濡れ時間を短くする。

(郡司 孝幸)

### 葉茎根菜類・いも類

#### ◆排水対策

---

梅雨期を迎えます。

畦や作物が冠水すると、根傷みによる生育不良や病気発生の原因となりますので、水田に作付けされているものは排水対策を徹底しましょう。

#### ◆ほうれんそう

---

高冷地栽培では、順次、収穫、播種となり、4月に播種したものは、上旬より収穫期を迎えますが、収穫時に緑が濃くて葉肉の厚い状態にするため、収穫予定の7～10日前から灌水を控えます。収穫後は直ちに次作の準備に取りかかり中旬には播種しますが、降雨も多くなり、べと病の発生しやすい環境となりますので、抵抗性品種を利用しハウス内の通風を良くしましょう。

#### ◆らっきょう

---

中旬までには収穫を終えましょう。土壌水分の多いときに収穫すると球の光沢が劣り、腐敗の原因になりますので、晴天の続くときに収穫しましょう。自家採種をする場合は、生育不良株を抜き取り、ネダニの防除を徹底し球が完全に

肥大充実してから堀上げ、陰干し後、ネットに入れて涼しい場所で保管します。

#### ◆食用かんしょ

---

トンネル栽培は収穫時期となります。収穫は、植え付け後100日目から可能となりますが、試し堀りを行い芋の肥大を確認してから収穫を始めます。植え付け後130日以上になると、皮色や形状が悪化しやすくなるので適期収穫に心掛けましょう。

#### ◆さといも

---

トンネル栽培は収穫期となります。数株試し堀りを行って重量を計り、10<sup>kg</sup>の換算収量が1<sup>トン</sup>に達したら収穫を始めましょう。

#### ◆おくら

---

収穫期です。草勢が低下すると葉の切れ込みが深くなりますので、追肥や摘葉については草勢を見つつ行ってください。

(河野 健次郎)

## 果樹

### 1 常緑果樹

---

#### ◆温州みかん

今年の温州みかんは、着花数がやや多い状況ですが、園地や樹によるばらつきが多く見られます。結果の多い樹では、6月中旬から、小玉果や内成り果を中心に荒摘果を始め、中玉以上の果実生産を目指しましょう。結果が少ない樹では、結果していない枝を前年の基部から除去しましょう。

品質向上のためのマルチ被覆は遅くとも6月上旬には済ませましょう。

#### ◆かんきつ全般

雨が多くなり、黒点病の防除が特に重要になってきます。1回目の薬剤散布から300<sup>mm</sup>の降雨があると薬剤の効果がなくなります。250<sup>mm</sup>程度の降雨があったら次の薬剤散布を行いましょう。

6月はカイガラムシの発生が始まる時期です。上～中旬に薬剤散布を行い、密度を減らすようにしましょう。

#### ◆完熟きんかん

今年は、4月上旬の低温のために新梢生育にばらつきが見られる園が見られます。特に温度の低い中山間地域では、出蕾から開花期までの加温が1番果の結果に効果があります。6月10日頃から5～7日間、昼温を30℃、夜温23℃で発芽を揃え、その後は開花まで、昼温25℃、夜温23℃管理することで、良

質の花を確保しましょう。

また、満開期のビニール被覆は、降雨による花粉の破裂を防ぎ、結果促進に効果があります。ぜひ実施しましょう。一番花開花以降は高温による結果不良が出ますので、外気温や結実状況を見ながら早めに除去しましょう。

#### ◆マンゴー

日焼けや高温防止のための過度の遮光は、着色不良や糖度の低下を招きません。遮光ネット等のこまめな開閉により、十分な日照を確保しましょう。収穫前から収穫期間中の過度の節水は、糖度低下や樹勢低下を招きます。定期的なかん水を実施しましょう。

収穫が終わった施設では、来年に向けた剪定等の作業に入りましょう。今年は出荷時期の遅れに伴い、剪定時期の遅れが多く見られます。枝の早期充実に向け、間伐による日射の確保、葉面散布の実施、発根促進剤の利用、早めの枝の整理などを行いましょ。樹齢の進行と共に、着花が不安定になったり、果実品質が低下している園では、思い切って改植を行いましょ。

樹冠の縮小を目的とした強度の剪定は翌年の花芽の着生を悪くするので、決して行わないようにしましょう。

剪定残さは、病気の発生原因となります。全て園外に持ち出して処分しましょう。

## 2 落葉果樹

---

#### ◆ウメ・モモ・スモモ

収穫が済んだら礼肥として、年間施肥量の3割程度を施用しましょう。

#### ◆くり

夏肥の施用を必ず行いましょ。特に、樹勢が落ちたり果実が小さい園での施肥は効果的です。また、翌年の結果母枝充実にも有効です。年間施肥量の2割程度を施用しましょう。肥効をよくするために除草も行ってください。

(山口 和典)

## 花き

#### ◆夏秋キク

---

曇雨天が続いた後の晴天日には「葉焼け」の発生が多くなりますので、気温の低下を凶るとともに、循環扇によるハウス内の送風やカルシウム資材の散布、葉水をうつ等の対策を実施して下さい。「フローラル優香」の8月出荷作型については正常な開花を促進するため、消灯後からシェード（12時間日長）を2週間程度実施して下さい。また、貫生花の発生を軽減するために、過剰な施肥は控え、適切な栄養生長期間を遵守しましょう。

系統や気象条件により節間の伸長具合が変わりますので、系統の特性と気象条件を勘案しながら適切なジベレリンの処理を行いましょう。

#### ◆秋ギク

---

秋ギク電照の親株床の施肥量は、窒素過多による採穂苗が発根不良や冷蔵中の腐敗を避けるために、窒素成分で1000㎡あたり10kg程度に留めて下さい。また、親株ほ場での病害発生は採穂本数の減少だけではなく、本ほへの病気の持ち込みにつながりますので、定期的な予防散布を必ず行って下さい。梅雨期間は排水対策を実施しましょう。

#### ◆デルフィニウム

---

播種及び鉢上げ期になります。288穴セル成型トレイで育苗している場合の鉢上げ適期は本葉2枚展開時です。夜冷育苗は早期抽だいを防止するため、鉢上げ後から16時間の夜冷を行ってください。セル用土及び鉢土の乾燥や過湿は生育不良や徒長の原因になりますので、生育に合わせた細やかなかん水管理を実施して下さい。高温、多湿の育苗期間中は、特にチビクロバネキノコバエによる被害が懸念されますので、定期防除に努めて下さい。

#### ◆ホオズキ

---

7月盆出荷を目標とした雨除け栽培では、6月中旬には着色のためのホルモン処理を行います。ホルモン剤散布後の高温は色ムラ発生の原因になりますので、散布はできるだけ涼しい早朝に実施し、散布後数日は寒冷紗により遮光して下さい。

また、作り置きをしたホルモン剤は効果が低いので、散布液は必ず散布直前に調整して下さい。ホルモン剤散布と他の農薬の近接散布によって色ムラや薬害が発生しやすくなりますので、ホルモン剤散布時期より前にアザミウマ類・ダニ類・アブラムシ類並びにうどんこ病の防除を徹底して下さい。高温時には換気を徹底して、高品質ホオズキの生産に努めましょう。

#### ◆シキミ

---

梅雨時期は黒シミ斑点病の感染の恐れが最も多い時期です。病害虫による被害は商品価値を低下させますので、適期防除に努めましょう。

また、シキミは特に湿害を受けやすい作物ですので、梅雨時期の排水対策を徹底して下さい。

(中村 宏)

## 畜産

### ◆家畜

---

いよいよ梅雨に入り、気温・湿度とも上がり、家畜の生産性の低下や下痢等の疾病が多くみられる時期となります。畜舎への通風の妨げになるような資材の整理を行い、風の通り道を確認しましょう。また、畜舎カーテンの上げ下げにより、雨が畜舎内へ降り込み敷料等が濡れないよう気をつけましょう。

乳牛に関しては、本格的に暑熱ストレスを受ける時期となります。酪農家に配布しましたヒートストレスメーターを活用し、牛舎内の温湿度指数が67（ヒートストレスメーターの黄色い部分）以上の場合、牛舎ファンを常に回し、牛体に風が当たるよう暑熱対策をしっかり行いましょう。

子牛の下痢対策では、石灰による牛舎消毒と敷料のこまめな交換が効果的です。もし下痢が発生している子牛に接触した場合は、人を介しての他の子牛へ下痢が蔓延しないよう靴底や手袋の交換等、徹底した消毒を心がけましょう。

飼料でのカビ発生が懸念されます。カビには種類によりカビ毒を発生し、場合によっては家畜の死亡も引き起こします。乾草や配合飼料の保管については、直接地面に置かずパレットなどを敷いてその上に置き、風通しの良いところで腐敗やカビの発生防止に努めます。飼槽や水槽にもカビが発生しやすいので、ブラシが届きにくい場所（特にカドや四隅）もこまめに清掃しましょう。

豚・鶏では、梅雨の晴れ間の急激な気温上昇で熱射病の多発が懸念されます。寒冷紗の設置で直接日光を遮り、換気扇やダクト、あるいはミスト機による散水で畜舎内の温度が上昇しないようこまめにチェックが必要です。

### ◆飼料作物

---

長雨による排水不良は、湿害などにより飼料作物の生育を阻害しますので、圃場周辺に排水溝を設置し、圃場内に水が貯まりにくいようにします。冠水した場合は、生育不良となるので水が引いた後、10㎡あたり窒素成分で1kg程度の追肥を行いましょう。

### ◆家畜防疫

---

毎月20日は一斉消毒の日です。口蹄疫の被害を忘れることなく、自分の家畜は自分で守るという強い意識を持ち、牛舎消毒などさらなる防疫の徹底をお願いします。

(須崎 哲也)



## 特用作物

### ◆茶

---

#### 1 二番茶の摘採

一番茶の摘採後40日程度経過すると二番茶の摘採が始まります。二番茶の摘採時期は降雨が多く、摘採が集中しやすいことから、降雨の影響を考慮した摘採計画を立て、欠点の少ない荒茶の生産を図ります。

樹勢のある茶園では、摘採前に5日間程度被覆し品質向上を図りますが、被覆に伴う黒葉腐れ病や、葉擦れ、葉焼け等の発生は、逆に品質低下を招くため注意が必要です。

#### 2 摘採後の管理

二番茶摘採後の整枝は、摘採の5～7日後に遅れ芽を除く程度で摘採面を整えます。

深刈り更新は、二番茶後できるだけ早く、古葉が残らない高さで実施します。また、一番茶後に中切りを行った園では、中切りの55～60日後に中切り面より3㍍高い位置で1回目の整枝を実施します。

施肥は、二番茶摘採前後に地区の施肥基準に準じて速効性肥料を施用します。

#### 3 幼木園の管理

定植当年から二年生までの幼木園では、台風の影響を回避するためにソルゴーの間作が有効です。また、5月に整枝していない二年生園では、7月末までに前回より5㍍程度上げて整枝します。

茶の根は湿害に弱いので、茶園内の排水にも注意してください。

(佐藤 邦彦)

### ◆しいたけ

---

#### 1 伏込み地の管理

しいたけ菌は、30℃を上回ると菌糸生長が急激に減退し、35℃以上では死滅する恐れもあります。直射日光によるほだ木の温度上昇を防ぐため、裸地伏込みの場合は、笠木の厚さが30㍍以上になるよう補充したり、西日が当たる部分の笠木の張り出しを長くする必要があります。

林内伏込みの場合は、庇陰が十分でない箇所には笠木等を補充し、周囲の下刈や枝払い、除間伐等を行い風通しを良くしましょう。

また、人工ほだ場の場合は、高温になりやすいので庇陰に十分注意しましょう。

## 2 ほだ場の管理

害菌の侵入を予防するため、梅雨に入る前に防風ネット等の撤去や周囲の雑草木の刈払いや除伐等を行い、風通しを良くしましょう。

また、倒れたほだ木や廃ほだを整理し、害菌・害虫の発生源にならないようにしましょう。さらに、しいたけ採取後のほだ木は、ほだ回しや天地返しを行い、ほだ木から均一にしいたけを発生させ、次回の原因形成を促進させましょう。

(小田 三保)

## ◆葉たばこ

---

今月は、中葉系の収穫・乾燥が主な作業となります。品質の良い乾葉に仕上げる様、適熟葉収穫に努めましょう。乾燥葉に土砂が付着している場合には除去を行いましょ。

1 収穫は、各ほ地のたばこの熟度を見極めて行いましょう。特に3回期以降の横掻きは取り急ぎせず、十分に成熟させて収穫を行いましょ。成熟の目安は、葉先が枯れ、中骨が乳白色になった状態です。

また、立枯病などの病害葉はくじり取りを行い区分収穫に努めましょ。

2 梅雨入り前には、ほ地の排水対策等を行い、耕種的病害防除を徹底ましょ。

3 乾葉の取下ろし時は、吸湿・過乾に注意して荷造りを行いましょ。乾葉水分は、支骨が折れる程度が目安です。

また各作業時での異物混入に注意ましょ。

4 包を貯蔵する際には、農薬・肥料・燃料など、たばこ以外の臭いを有する物を避けて貯蔵ましょ。

また、虫害の被害を受けない為に、全包ビニール梱包を行いましょ。梱包の際は水分に気をつけて口を養生テープ等で閉じましょ。

(松元 貴光)

### 内容の詳細について

6月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

# なになに農業アラカルト

## ほうれんそうの輪作について

---

宮崎県の畑地帯ではさつまいも、だいこん、にんじん、さといも、じゃがいも等の作付が盛んです。近年、冷凍加工野菜工場が相次いで整備され、ほうれんそうの栽培が急速に拡大しており、輪作体系の確立は重要な課題となっています。輪作は作物同士の相性が重要ですが、収益性のみで輪作体系が組まれる事例では、相性の悪くて生育障害を生じる事例もみられます。

加工用ほうれんそうは青果用に比べて大柄（草丈40～50<sup>センチ</sup>）に生育させるのが特徴です。ほうれんそうは直根性で湿害による立ち枯れが出やすいため、排水性に優れた耕土の深い圃場の選定が必要です。また、直根の伸長を促すため深耕の徹底や石灰資材による土壌pHの矯正と吸肥力が高いので土づくりを入念に行う必要があります。ほうれんそうの好適土壌pHは7前後と高く、後作のじゃがいもではそうか病、さつまいもでは立ち枯れ病が発生しやすくなります。さといもは同じ芋でも石灰要求量が高いので、多収となる事例も見られますが、ネグサレセンチュウがつきやすく連作障害が出やすいので輪作年限の遵守が必要です。

また、ほうれんそうの栽培が急速に拡大している児湯地域ではキャベツ等の連作によるネコブ病の発生が問題となっており、昨年は激発するケースが見られ、防除対策が必要となっています。ネコブ病はほうれんそうやハイオーツ（エン麦の一種）を栽培すると被害が減ることが知られており、激発ほ場ではほうれんそうを補完的に経営に取り入れることで、主幹作物の経営を安定させる効果が期待されています。

新規に栽培を始めるほ場の多くが、耕土が浅く地力も低い事が多いので、ひまわりやイネ科、マメ科の緑肥との輪作は地力増強対策として有望です。ただ、栽植密度や栽培期間などが遵守されずに効果が劣るとしている事例も見られるので、緑肥も除草等の栽培管理を行って十分に生育させることが、効果を十分に引き出すことにつながります。

緑肥栽培→深耕→有機物・石灰施用による土づくりを徹底することで、根域が拡大し、栽培が容易となることから、夏場のほ場管理をきちんと行い多収をめざしましょう。

(河野 健次郎)

## 向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稲	葉いもち 穂いもち	並 —	5月中旬に、県内で葉いもちの発生が確認されました。早期発見に努め、病斑が認められたら速やかに液剤等で防除します。 常発地や迫田等の風通しの悪いほ場では、特に注意が必要です。
	斑点米カメムシ類	—	斑点米の混入が極少量でも米の等級に影響するため、例年被害の発生する地域では必ず防除を行います。防除適期は穂揃い期とその7～10日後で、2回防除を行うと効果が高くなります。
普通期水稲	葉いもち	—	補植用の置き苗は、いもち病が発生しやすく、また、伝染源となるので早めに処分します。
	スクミリンゴガイ	—	早期水稲の一部で発生の多いほ場が確認されているので、水田の水口に金網を張り、貝の侵入を防止するとともに、生息数が多い場合は捕殺するか粒剤による防除を行います。
野菜・ 工芸作物	アブラムシ類 ハスモンヨトウ	並 並	アブラムシ類は、キュウリモザイク病やたばこ黄斑えそ病などのウイルス病を媒介しますので、早期発見に努め防除します。
施設野菜 ※	土壌病害虫 コナジラミ類 アザミウマ類 アブラムシ類	—	近年、微小害虫によって媒介されるウイルス病（黄化えそ病、黄化葉巻病、モザイク病など）が問題となる事例が発生しています。 次期作の発生源になりますので、栽培終了後は株を抜き取り、少なくとも10日間は施設を密閉し、媒介虫を死滅させてから残さを処分します。また、ほ場周辺の除草も徹底します。
いちご (親株)	うどんこ病 ハダニ類 アブラムシ類	前年より少ない 前年より少ない 前年より少ない	うどんこ病は予防に重点をおくとともに早期発見に努め、発病初期の防除を徹底します。 ハダニ類、アブラムシ類は密度が高くなってからの防除は困難なので、早期発見に努め防除を徹底します。
果樹全般	果樹カメムシ類	並	県内3か所に設置しているフェロモントラップでは、平年並の誘殺状況ですが、多飛来を見てからの防除では手遅れとなるので、園内外を見回り、早期発見、早期防除に努めます。 特に、ウメやモモなどの結実中の果樹類では注意が必要です。
カンキツ (露地栽培)	そうか病 かいよう病 黒点病	並 並 並	黒点病は、その感染源である枯れ枝の除去に努めます。また、剪定枝をほ場周辺に放置していると、激発するおそれがありますので適切に処理します。
	ミカンハダニ ミカンハモグリガ アブラムシ類	やや多 — やや少	ミカンハダニの発生がやや多い状況です。生息密度が高くなると防除が困難になるので、寄生葉率30%または1葉当たり虫数0.5～1頭を目安に防除を行います。
茶	炭疽病 カンザワハダニ チャノコクモンハマキ チャハマキ チャホソガ ※ チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ クワシカバガラムシ	やや多 やや多 並 並 並 やや多 やや少 並	チャノミドリヒメヨコバイの発生がやや多いため防除情報を発表しています。新芽生育期に加害されると減収、品質低下が著しいため、萌芽期から開葉初期に薬剤散布を行います。 カンザワハダニの発生がやや多くなっています。抵抗性が出やすいので、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行います。 チャノキイロアザミウマの発生は、例年二番茶期から多くなります。多発生してからでは防除が困難になるので、早期発見、早期防除に努めます。
<p>1) ※は防除情報を発表しています。</p> <p>2) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。</p> <p>3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<a href="http://www.jpnn.ne.jp/miyazaki">http://www.jpnn.ne.jp/miyazaki</a> です。</p>			